

五十年の歩み

有限会社 映文社
社長 佐藤春雄

五十年の歩み

社長 佐藤春雄

いまテレビでは「おしん」が大評判ですが、あの当時は農村の娘たち息子たちは差し当りの食^くべらしのために町に、東京に売られ又は小僧に出されました。この農村の貧困が太平洋戦争の一大原因となったのでありますが、私が東京に出て来たのは昭和五年十月五日でした。就職のあてがあったわけではありません。リヤカーを曳いて世田ヶ谷、練馬、板橋等郊外まで走り廻りました。この会社は一年足らずで倒産、当時の不況は東京だけが例外ではなかったのです。新聞配達もやりました。当時周旋所というところがあったのれんを下げて求職者を世話していたのですが、此ののれんもくぐりました。新聞に二、三行の求人広告が出ると二、三人のところへ五、六十人も集まるのです。こうした広告で金文社というところに入社しました。これが印刷に関係することになったそもそものはじまりということになります。二十三歳のことですがやがて耕文社という謄写版印刷屋を経て映文社の創立となりました。金文社当時の友人四、五人は満洲に渡り私の眼の前に再び現れることなく消えて行きました。

昭和十年前後は洋画の全盛期でした。ゲリーリカーバ、デイトリッヒの「モロッコ」或いは「パリの屋根の下」などは新聞配達の頃、本郷座で見たと記憶します。アメリカ映画東京支社には、バラマウント、ユナイテッド・アーチスツ、コロムビア、アールケーオ、又はワーナー・ブラザース等がありました。これら殆んどから受注しました。検閲台本というもので映画の中で俳優の発声する声をすべて記録するものです。一頁を左と右に分けて左に英文、対訳を右に日本語で書きます。注文を受けて三、四日で納品するのですから徹夜で書く作業です。朝までに印刷を終り早朝に製本依頼、納品する。

此の本は和紙印刷で昭和十四年頃になると物資不足がぼつぼつ囁かれるようになり山形屋紙店の和紙二千枚包を百五十個を買占めたところ四畳半に一杯になりました。戦争の様相はいよいよ濃くなるに従って洋画の輸入は禁止になりました。日本映画社、現在の日本ニュース映画社の前身ですが、ここで戦争ニュース、占領地の宣撫班用映画の台本の印刷を受注するようになりました。ハワイ空襲のニュースや戦陣訓等の短篇、占領地向けの映画はアメリカ映画台本にならった現地語と和文の対訳の形式でした。ニュース映画は豊島園の裏に東洋現像所があつて此処で録音が行われるのですが、いつも夜中の作業です。録音が終わったところで原稿を受けとります。

アナウンサーが竹脇昌作という人で帰途真夜中自動車に同乗して神楽坂の夜台で一杯傾けたこともありました。俳優竹脇無我の父で、戦後競馬の実況放送を行いボ Iskラーの名で呼ばれましたが自殺の悲劇で幕を閉じました。

ハワイ空襲、シンガポール陥落以後召集と、徴用によつて街には働く人が姿を消し、映文社も妻と私だけになりました。

日に夜を継いで働くという情況が長くつづきます。身心の疲労は極限に達して私は早く赤紙が来ることを望むようになりました。昭和十九年六月十日横須賀海兵団入団の令状を手にして、これで妻に休暇をとらせることが出来るとホッとしたものです。妻も亦夫を戦場に送る怖れを忘れてホッとしました。これで戦前の映文社は終りを告げましたが、戦後再び続く苦難を妻に負わせたことを思う時、胸をしめつけられる想いに堪えません。

戦争は日本の国を焼野原と化して終りを告げました。幸いといおうか、映文社は焼け残り、昭和二十三年ようやく映文社を再開することが出来ました。

我が社の向いにある日本教職員組合からすぐに仕事が出るようになりました。戦争によつて活版印刷が全滅して、騰写版印刷の全盛時代となったわけです。二十四年十月、老朽化した三階建の木造家屋を全面改修をしました。二十五万円を要しました。人間万事塞翁が馬といいますが、二十五年二月二十五日隣家の失火により全

焼する羽目となり、此の時私は再起の勇気を失うほどの放心状態に陥りました。

再建に当り二階木造としましたが費用六十五万を要しました。今日の貨幣価値にして凡そ三千万円位にはなりませう。

二十五年も終りに近づき、活版印刷の復興が盛んとなり騰写版印刷の衰退がはじまりました。

仕事の受注は困難を極め、社業は創業以来最悪の時期となります。

此の時期、入江たか子プロ、東宝、新東宝等の騰写版印刷の仕事をやりましたが、漸次タイプ印刷の業界への進出が目立ちはじめました。

従来通り騰写版印刷で生きて行けるかどうか、タイプ印刷の導入によって社業を盛り返すことが果して可能かどうか、決断を迫られたわけです。タイプの採用は予想以上の困難を極めました。タイプリストは手持ちぶさたに編物などで時間を過すという状況で、毎日毎日が苦渋に身をさいなまれる思いでした。

やがてタイプ印刷が騰写版印刷に代る業界の主流となるにつれて小学館にも出入りするようになり今日の基盤を確立することが出来たのであります。

当時の小学館は三階建のビルで今の駐車場にありました。今からふりかえれば中小企業の上という位のものでしょうか。原色世界百科大事典は此の旧ビルで編集発刊され全十一巻別冊二巻の大事典は戦後初の大事典として飛ぶように売れ、現在の

小学館ビルの建設となり以後急速な発展を遂げ、集英社を傘下に収める日本最大の一ツ橋コンツエルンとして出版界に君臨するに至りました。

当時私は天の利、地の利われにありと大書して壁に貼りました。然し菲才にして思うような業績をあげることが出来ませんでした。私共は宝の山にいるんだぞと社員を激励しつづけたのであります。

オフセット印刷は英国のゲステットナー、日本のリョービ印刷機のB4、から始まりましたが、小学館、集英社の如き大会社の印刷物受注のためには大型印刷機の導入こそ喫緊事と考えビル建築を決意しました。十年程前より初めることが出来た集英社の売上げカードも次第に大きくなって来ていた時です。五十二年六月ビルは完成しました。

敷地二十坪に建つビルは、建って見てはじめて驚く程の狭さです。菊全判の大型機がようようおさまる程のもので、二階には売り上げカード印刷のB4、A3を据える現在の体制です。これ以上機械を増やすスペースがありません。第二工場をその後借家することが出来、菊半二色機、同一色機を導入しました。

此処まで来るのに五十年を要しましたが、すべてが昨日の如くであります。既に七十三歳。なお前進をつづける決意であります。

昭和五十八年十二月二十五日

於 九段グランドパレス

創業五十年記念社員御家族慰勞懇親パーティー